

景 観 の 考 え 方 ― その 1 ―

岡 本 真理子

1. はじめに

2005年6月に「景観法」(2004年成立)が全面施行となり、東海地方でも景観計画策定が可能になる「景観行政団体」に名乗りをあげる市町村が見られるようになった。

それまで「景観」についてはいわゆる「法」の裏付けがなく、市町村が独自にそれぞれの地域の景観を「守る」しかなかった事を考えれば、格段の進歩といえよう。しかし、景観法に示される「良好な景観」とはどのようなものだと考えれば良いのか、それは地方が独自で考えて行かなくてはならない問題であり、末端組織ではそこに苦慮もしているようである。それは、我が国では古来、町並みや景観について考慮する文化に乏しかったことも一因であろう。

そこで、まずは「景観法」の成立によって可能になった「景観計画」⁽¹⁾の策定など、全国の地方自治体における進捗状況を明らかにした上で、「景観法」の基本理念に則する景観の考え方の一例を、絵画史料を用いながら提案してみたい。

2. 景観法について

「景観法」には、その「目的」に「我が国の都市、農山漁村等における良好な景観の形成を促進するため、景観計画の策定その他の施策を総合的に講ずることにより、美しく風格のある国土の形成、潤いのある豊かな生活環境の創造及び個性的で活力ある地域社会の実現を図り、もって国民生活の向上並びに国民経済及び地域社会の健全な発展に寄与すること」(「景観法」目的)とあり、およそ以下のような5つの理念が示されている。

- ①良好な景観は、美しく風格ある国土の形成と潤いのある豊かな生活環境の創造に不可欠であるので、国民共通の資産として現在及び将来にわたって整備・保全が図られなくてはならない。
- ②良好な景観は、地域の自然、歴史、文化等と人々の生活、経済活動等との調和により形成されるものであり、適正な制限の下にこれらが調和した土地利用がなされたうえで、整備・保全が図られなくてはならない。

- ③良好な景観は、地域の固有の特性と密接に関連するものであり、住民の意向をふまえた上で、地域の個性・特性をのぼすような景観形成が図られなければならない。
- ④良好な景観は、観光や地域間交流の促進に大きな役割を果たすので、地域活性化のために地方公共団体、事業者、住民が一体となって取り組まなくてはならない。
- ⑤良好な景観形成は、良好な景観の保全だけでなく、新たな創出を含むものとする。

このように景観整備・保全の基本理念や、国、地方公共団体、事業者、住民の責務が明確化され、景観についての基本計画が作成されるとともに、景観形成のための行為規制を伴う仕組みが創設されたのである。これにより、各自治体の策定する景観条例が法的裏付けを持つようになり、強制力を持つ規制の導入も可能になった。

一方、課題としては地域の行政、住民が自発的に動かなければ対象地域は広がらない。用途地区規制が緩やかなままでもあり、郊外の乱開発など景観悪化に歯止めがかけられない可能性もある。

かつては「景観保護」などと言われ、町並みは歴史景観や自然景観をそのまま残すことに主眼を置いてきたが、しかし、今回の「景観法」では理念の中で、明らかに地域の経済活動を考慮した上での景観の創出を容認している。

つまり各地域の景観に対する考え方や温度差により、地域間格差が生まれる懸念も生まれたのである。

景観計画の策定を行うことのできる「景観行政団体」となりえるのは、①指定都市の区域にあっては指定都市、②中核市の区域では中核市、③その他の区域に置いては都道府県、④指定都市及び中核市以外の市町村であって、あらかじめその長が都道府県知事と協議し、その同意を得た市町村の区域にあっては、当該市町村とすることになっている。

上記①から③については法成立後に自動的に「景観行政団体」となったわけであるが、④については、まさに自発的に手をあげて「景観行政団体」となることとなる。小さな市町村にあっては今まで県などの意見に従ってい

れば問題なかった景観について、自立して考えなくてはならなかったのである。その上、人材、予算などがネックとなっておりそれと「景観行政団体」に手を挙げることは難しいのが現状である。

平成21年10月1日時点での「景観行政団体」は都道府県47、政令市18、中核市41、その他312の合計418団体となっている（表-1）。ちなみに東海三県（愛知・岐阜・三重）で団体となっているのは次の表のとおりである（表-2）。

表-1 各都道府県の景観行政団体数
(平成21年10月1日現在)

県 名	景観行政 団 体 数	県 名	景観行政 団 体 数	県 名	景観行政 団 体 数
北 海 道	13	新 潟 県	6	岡 山 県	6
青 森 県	4	富 山 県	3	広 島 県	7
岩 手 県	7	石 川 県	4	山 口 県	11
宮 城 県	4	岐 阜 県	14	徳 島 県	4
秋 田 県	5	静 岡 県	13	香 川 県	10
山 形 県	5	愛 知 県	11	愛 媛 県	19
福 島 県	8	三 重 県	6	高 知 県	7
茨 城 県	7	福 井 県	10	福 岡 県	9
栃 木 県	9	滋 賀 県	8	佐 賀 県	5
群 馬 県	8	京 都 府	7	長 崎 県	12
埼 玉 県	14	大 阪 府	10	熊 本 県	6
千 葉 県	12	兵 庫 県	7	大 分 県	11
東 京 都	10	奈 良 県	4	宮 崎 県	16
神 奈 川 県	23	和 歌 山 県	3	鹿 児 島 県	19
山 梨 県	14	鳥 取 県	4	沖 縄 県	8
長 野 県	9	島 根 県	6	合 計	418

表-2 東海3県の景観行政団体一覧
(平成21年10月1日現在)

都道府県	政令市	中核市	その他	景観行政団体移行日
岐 阜 県		岐 阜 市	各務原市 多治見市 中津川市 美濃市 可児市 下呂市 大垣市 高山市 白川村 飛騨市 恵那市 美濃加茂市	平成17年2月7日 平成17年2月25日 平成17年3月30日 平成17年6月20日 平成17年11月11日 平成18年1月27日 平成18年3月27日 平成18年7月21日 平成19年6月27日 平成19年9月28日 平成21年5月 平成21年5月1日
愛 知 県	名古屋市	豊 橋 市 岡 崎 市 豊 田 市	犬 山 市 長久手町 瀬 戸 市 半 田 市 常 滑 市 一 宮 市	平成17年3月24日 平成17年9月1日 平成19年11月1日 平成20年5月1日 平成20年8月1日 平成20年11月1日
三 重 県			伊 賀 市 四日市市 松 阪 市 伊 勢 市 鈴 鹿 市	平成18年12月1日 平成19年10月10日 平成19年12月1日 平成20年3月1日 平成21年1月1日

各県で総市町村数など均一ではないので一概にはいえないが、大都市域に近い県では景観行政団体の数が多く、東北地方、中国地方に少ない傾向が見られる。

本学の位置する各務原市は東海三県ではいち早く、全国でも五指にはいるほどの早さで景観行政団体への名乗りをあげており、その景観に対する取り組み意欲の高さを感じさせる。

「景観行政団体」になると、まずは「景観計画」を策定することになるが、作業の繁雑さなどから平成21年10月1日現在、策定済みなのは「景観行政団体」418の内、194団体で46%強ほどというのが現実である。しかし、平成21年2月1日時点では景観行政団体376の内、策定済みは147団体で37%であった事を考えれば、着実に量を増やしているとも言えよう。

また、「景観行政団体」に名乗りをあげた市町村が少ない県でも、それらの市町村が着実に「景観計画」を策定して景観の保全・創出に努めているところもあれば、多くの市町村がとりあえず「景観行政団体」に名乗りをあげたものの「景観計画」の策定等は先延ばしにされているような地域もある。(国土交通省都市・地域整備局公園緑地・景観課景観・歴史文化環境整備室発表資料「景観行政団体（平成21年10月1日時点）」)

東海三県ですでに「景観計画」を策定しているのは、岐阜県内では各務原市を始めとする8団体、愛知県内では名古屋市を始めとする3団体、三重県内では三重県を始めとする5団体となっている。

「景観行政団体」は岐阜、愛知、三重それぞれ14、11、6団体であり、策定率はそれぞれ57%、27%、83%となり、愛知県内における「景観計画」未策定率が高いことが分かる。

さらにこの「景観計画」の中に盛り込むべく「景観地区・準景観地区」の策定、「景観協定」の認可、「景観重要建造物・樹木」の指定などを行うことになるが、東海三県においては唯一、各務原市がこれら全てに実績を持っており、中でも、住宅地域ではなく新規に造成開発された工業地域で景観協定を結ばせ、既存の「工業」のイメージから脱却した緑の中の工業地域を実現しつつあるところが注目される。

このように景観計画は、都市計画をベースに町全体の未来の形をどうしていくのかということを、すでに決定している市町村にとっては策定しやすいものの、景観法ができたのでとりあえず考えようというレベルでは策定は困難で、県などの指導も不可欠であろう。

さて、このように「景観行政団体」に名乗りをあげたものの、次にどうすべきなのか。

全国の市町村はそれぞれの特徴を持ち、たとえば歴史遺産や自然遺産、文化遺産などを地域内に多く持つ場合には、それを拠り所として景観計画を考えていく場合も多い。しかし一方、自分たちのまちの景観について意識の高い住民や行政職員と議論をしていても「私どもの地域には特筆すべき物はありませんがどうでしょう」と相談を受けてしまうこともある。

「景観」は「Landscape」を日本語訳したものであり、本来、大都市や小さな農山漁村などの区別をせずに、人の手が加わった風景すべてを言う語であろう。しかし、まずは「都市景観」の整備を第一歩としたことから、近年まで「景観」といえば市中を主眼にしがちであった。そして最近になってすら、大都市でも地方の自然豊かな町でも「美しい街」とは、画一的に「道路脇に花壇がある」などと誤解している住民も多く見られるのは残念なことである。

しかし、今回の「景観法」では、はっきりとした「景観」の定義はなされていないものの、都市部だけではなく農山村の風景をも考慮すべき点として取り入れている点は大いに評価できる。

具体的にはいわゆる「建築」以外に、良好な景観を形成する上で必要な要素の一つとして道路・河川などの土木的な公共施設の整備や、「景観農業振興地域整備計画（景観農振計画）」といった計画があり、景観計画区域内にある農業振興地域についても計画を策定することができるとしている。つまり「農山村景観」も重要な景観要素として取り上げられているのである。

以上のような意図を持った「景観法」が策定されたことをふまえ、次に日本人が歴史的に培ってきた「景観意識」の中から景観形成のヒントを探ることにする。

3. 歴史にみる日本人の景観意識

古来より日本人はたとえ自分自身の家が狭くとも、小空間の中に自然を手本とした美を見いだすことを得意としてきた。たとえば「坪庭」「盆栽」「生け花」と例をあげればきりが無い。しかも狭い自邸の空間に、まわりの景観を取り込んで「借景」という広がりをつくり、自他を区別しない景観づくりさえ行ってきた。

幕末に日本を訪れたイギリス人園芸学者のフォーチュンが、「緑の美しさは世界のどの都市も江戸にはかなわないだろう」（『幕末日本探訪記』）と述べているように、当時の大都会江戸でさえ自然が豊富で、日本人はこれを感性で捉える事を得意としていた。

さて、江戸時代には「名所図」という、今で言う絵は

がきのような役割をする浮世絵が多く出版されている。

風景を描いた浮世絵といえば歌川（安藤）広重の『東海道五十三次』などが有名であるが、もっと地域限定の、江戸、尾張などの名所絵図も多く描かれている。そこでは単に有名な場所を描くだけではなく、その場所ならではの魅力を感じることでできる季節、時間、天候などを限定したり、景観と地域の祭りや行事などを結びつけて描くなど、巧みに場所ごとの魅力を描写している。

この「見る案内記」ともいうべき「名所図」は、特に江戸時代の行動文化に刺激されて18世紀後半から19世紀中期頃にかけて大いに流行し、日本人の、景観に対する文化的成熟度を非常によく示している。つまり「名所図」は、その時代の人々の景観に対する知性や感性の成熟度をも知り得る恰好の史料といえよう。

「名所図」は、その内容からおおよそ3期に分けることができ、17世紀中期から18世紀後期では文字中心の読む案内記であったのが、18世紀後期から19世紀中期には見る案内記となり、19世紀中期以降では彩色が行われて絵画性が強く、空間の叙情性が特に強くなっている。

さらに、日本人の景観に対する意識を読み取ることができるのは、このうち18世紀後半から19世紀にわたって上梓された史料である。具体的には、『名所江戸百景』等の諸史料があげられよう。『名所江戸百景』に描出された118景の景観の詳細分析については別稿に譲ることにするが、ここでは数点を取り上げ、景観形成要素として注目すべき点について述べる。

まず、「日本橋雪晴」（図－1）では単に日本橋の景観を描くのではない。雪が降った後の晴れ間から富士山を背景に見る日本橋の景観を良しとし、雪のやむのを待っていたのであろうか、川面には荷を運ぶ多くの船が見受けられる。川沿いを行き交う商人たちも忙しそうで、このような経済活動のにぎわいが日本橋という景観のあるべき姿、見せたい姿であることが理解される。そして結果的には季節、天候を指定した「名所」として描いているのである。

同じ雪の日でも「目黒太鼓橋夕日の岡」（図－2）では、太鼓橋を渡る人の菅笠や蓑に雪がかぶっていることなどから、まさに雪の降る最中の景観を描いていることがわかる。「夕日の岡」という名であるにもかかわらず、雪の景を良しとしているのである。日本橋の活気づいた描写とは反対に、ここではしっとりと落ち着いた、ざわめきのない世界を好ましい景観として名所図の一景としており、季節、天候の限定をしていることがわかる。

「猿わか町よるの景」（図－3）では天候と時間を限定して、月を隠す雲一つない晴れた満月の夜を描出してい



図-1 日本橋雪晴



図-2 目黒太鼓橋夕日の岡

る。満月ということから、秋を季節として示しているかもしれない。満月が高い位置にあり、夜も更けた時間であることが推察されるにもかかわらず、通りには多くの人が行き交っていて、江戸の人々の夜間行動を垣間見せている。猿若町といえば芝居小屋が多く集まるところで、江戸の一大娯楽街でもあり昼夜を分かたぬにぎわいを見せたかったのであろうが、特に満月の夜の、人々の影がくっきりと見える時間を良しとして、天候、時間の限定を行っている。

さらに「霞かせき」（図-4）では、たこ揚げをする正月の霞ヶ関の有様を描いており、ここでは季節の限定と言うより景観を正月という事象とともに捉える試みが示されている。



図-3 猿わか町よるの景



図-4 霞かせき

一方『尾張名所図絵』では「広小路」（図-5）を夜にも多くの人が行き交う街のにぎわいとして描いている。上部の添え書きに「・・・納涼の地は広小路・・・」などと書かれていることから夏の夜の様子を描いているようである。さらにそのにぎわいが「江戸薬研堀」を彷彿とさせるとも記していて、活気のある夏の夜の広小路を名所としている。

同じ夜でも『名所江戸百景』の「廊中東雲」（図-6）

では、夜のにぎわしい遊郭の有様ではなく、ほおかむりなどしながら門を出て行く、けだるい明け方の様子を描いてみせ、日本人の感性の鋭さを感じさせる。門の横に見えるのは桜らしく、春先の明け方の様子を描いていると考えられる。

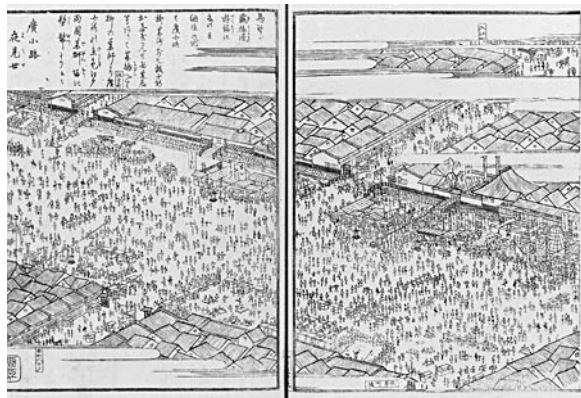


図-5 広小路夜見世



図-6 廊中東雲

このように景観を単なる物としてではなく、季節や時間、天候を通して様々な姿をみせる生き物のように取り扱っているところが、この時代の名所図の大きな特徴である。中には有名な建築や工作物を中心に据えて描かれた景もあるが、「名所図」と名乗りながらも、その場所の認知度よりも季節、時間、天候の重要性を示している。

つまり、何気ない風景の中にも「時」の限定によって見るべき名所となりうることを示唆しているのである。

4. まとめ

我が国では近世までは町を統一的に整えるという思考概念が少なく、豊臣秀吉が天下統一を果たしたとき、京都を城下町化し、町並みを作ることを企図したことが記録に残る程度で、彼は織田信長が安土の地で実行し得なかった町並み整備を行いたいと考えたようである。とにかく、伏見より御成道沿いの民家が平屋や茅葺きであっ

たのを見て奥はどうであれ、表だけは二階建てにして角柱を用いるよう命じている。

しかしながら、京都を描写した洛中洛外図屏風を見る限り、関ヶ原役後は三階建てさえ出現して、秀吉の意図した統一的町並みとは違った、多様な町並みが発展している。さらに幕藩体制が確立すると、封建的階級による政治的統制が建物の上にも反映され、慶安2年（1649）には三階建てが禁止されているし、享保の改革時には「家作り、なるべく成ひきく建⁽²⁾」⁽²⁾ ることが市中にふれられているほどである。

このように、町並み景観を作ることには意識を働かせることのなかった日本人の中にはヨーロッパなどでみられる歴史的都市景観を規範としたいと考える人もいるが、果たしてそれが日本の景観であろうか。

日本は明治維新時と第二次世界大戦後の大きく2回にわたり、西欧に追いつき追い越せとばかりにその模倣をしてきた。景観の分野においても、日本人が元来持っていた景観に対する感性を失いかけたのである。

先述の「名所図」で描かれた、またその「名所図」を良しとして買い入れた、多くの先人たちの豊かな感性こそが、取り立てて見るべきところもないと思いがちな現代の「まち」、「むら」などで景観を考えてゆくときに最も参考になるものであろう。

感性（五感）で捉える「風景」を科学的に考えるのが「景観」であり、地域の歴史・文化・風情に合致しない物は、たとえそれが単体として美しかろうとよい景観とはならないと考える。

「注」

- (1) 景観行政を行うときの基本ともなる計画で、良好な景観を保全する必要がある土地の区域や、地域の自然、歴史、文化等から見て、地域の特性にふさわしい良好な景観を形成する必要がある地域を定めることができる。
- (2) 軒高を低くの意味

「参考文献・資料」

1. 『江戸と江戸城』内藤昌 鹿島出版会 昭和41年
 2. 『洛中洛外図大観』狩野博幸他 小学館 昭和62年
 3. 「文化の都市計画」『新都市』岡本真理子（財）都市計画協会 平成元年11月号
 4. 『日本 町の風景学』内藤昌 草思社 2001年
 5. 『各務原市景観計画』各務原市 平成18年5月
 6. 『景観まちづくり論』後藤晴彦 学芸出版社 2007年
- ・資料『美しい国、まちづくりのために 景観法の概要』（財）都市計画協会
 - ・資料『農の美 一心でつなぐふるさと景観ー』（財）農村開発企画委員会 平成17年
 - ・『江戸名所絵図』
 - ・『尾張名所絵図』